ヴィクトリア朝生体解剖論争と『ドリアン・グレイの肖像』

丹　治　　愛

1　生体解剖論争のなかの科学者像

1870年代のイギリスは生体解剖論争という新しい事件を体験していた。1822年の「畜牛の残虐で不当なあつかいを禁止する法」（別名「リチャード・マーティン法）の制定と、その2年後の動物愛護協会（直訳では「動物虐待防止協会」）の結成以降、めざましい進展を遂げていた動物愛護文化と、実験生理学の方法として生体解剖――実験動物に苦痛をあたえる可能性のある動物生体実験――を大陸諸国より導入しようとしていた科学界が、真っ向からぶつかりあった論争、それが生体解剖の是非を問う生体解剖論争だった。

生体解剖を正当化しようとする科学者たちの論理は、生体解剖は生理学を前進させ、生理学の前進は人類への具体的な利益をもたらす、という三段論法的な図式として要約できる。人類に具体的な利益をもたらす以上、たとえ動物に痛みをあたえることがあるにしても、生体解剖は容認されなければならない、ということである。生体解剖の有用性がそれを正当化する根拠なのだった。

これにたいして、生体解剖に反対する人びとの批判は、かならずしも医学的応用（application）をともなわない生理学的な知識があるということ、すなわちフリーマンが「実用的なものに通じていかない」「たんなる知識」と呼んだような生理学的な知識[*1]がありうるということにむけられていた。その結果、たとえ当面にしろ「実用」あるいは応用とはむすびつかない生理学的知識というものがあるとしたら、そのような抽象的な生理学的知識の発見を目的とした生体解剖も正当化され容認されるべきか否かという問いが、生体解剖論争の重要な争点のひとつとして浮上してきたのである。

> われわれはジレンマに直面することになる。もしも生体解剖が偶然の利益を得られるかもしれないことを理由に容認されれば、たんなる好奇心に歯止めをかけることはむずかしい。その一方で、もしも生体解剖がなんらか

の特別な医学的解決を目的にしている場合に限定されるとすれば、偶然の利益を失うことになりかねない。(Lathbury 218)

このジレンマを前にして、「生体解剖が正当化されるためには、予備的な知識をもった人間が想定するなんらかの明確な目的、解決されるべき明白な疑問、取り除かれるべき重要な疑念や不確実性、人類への恩恵の可能性をふくんだ、確証ないし反駁されるべきなんらかの仮説がなければならない」という慎重な立場ももちろんあった（Watson 867)。

しかし、晩年のチャールズ・ダーウィンがL・ブラントンに宛てた手紙（1882年2月14日付）の一節には、それとは異なる立場がはっきりと表明されている。

『隔週評論』と『コーンヒル・マガジン』に載ったガーニー氏の論文をお読みになりましたでしょうか。あいまいな書き方ですが、とても頭のよい論文のように思われます。彼の言葉にはほとんど賛同します。しかし、なんらかの直接的な利益が予想されないかぎりいかなる実験もこころみてはならない、と暗に言っているらしいいくつかの箇所については同意できません。これは科学の歴史全体と矛盾する大きな間違いです。*ii

ダーウィンは生理学的な知識が「直接的な利益（some immediate good)」をもたない抽象的なものでありうることを認めたうえで、なおかつそのような生理学的な知識を目的とした生体解剖のこころみを容認しているのである。そしてこの彼の立場が、1876年8月に定められた生体解剖法の立場だったのである。

というのは、1876年1月に出された王立委員会の報告書では、容認されうる生体解剖の目的として、「人間の苦痛の緩和や人間の生命の延長に応用可能な(applicable) 知識の獲得」(“Report of the Royal Commission”, cited in French 107-108)と記されていた部分が、それから7か月後の最終的な法律の条文では「生理学的な知識、あるいは生命の救済や延長、苦痛の緩和にとって有用となるであろう知識の増進」となっているからである。すなわち、「生理学的な知識」と「有用となるであろう知識」が「あるいは」という言葉で切り離されることによって、科学者は生体解剖を、「生命の救済や延長、苦痛の緩和」という目的が具体的に見えなくても、「生理学的な知識」をそれ自体のために、自己目的的に追求することを容認されることになったのである。

そしてそれが反生体解剖の立場をとるルイス・キャロルにとっては科学者のイメージとなっている。「生体解剖にかんするいくつかの一般的誤謬」のなかで、彼は生体解剖実行者の真の動機は、知識をもって人類に貢献したいという「博愛主義」の「高邁な動機」であるよりも、知識を、それが有用であれ無用であれ、それ自体のために求める欲求――「科学的知識への渇望（lust of scientific knowledge)」――にこそあるのではないか、と問いただしているからである（Carroll 849)。

そのような科学者の典型はウェルズの『モロー博士の島』(1896) のモロー博士である。動物を生体解剖して人間を造ろうとする彼の動機は、第一義的には以下のようなところにあると書かれている。

「わたしはこの研究を、それがわたしを導くとおりに進めてきた。真の科学研究はそのようにしか進みようがないとわたしは聞いたものだったからな。問いを発し、答えを得る方法を工夫する――と、また新たな問いがあらわれるのだ、これは可能か、あれは可能か、と。これが研究者にとってどのような意味をもつのか、君は想像できないだろう――いかに知的な情熱が大きく育っていくことか。この知的な欲望の、奇妙な無色の喜びは、君には想像もできまい。目の前にあるのはもはや動物でも、被造物としての仲間でもなく、一個の問題なのだ！　共感による痛み（sympathetic pain）――そんなものは、ずっと昔の体験としておぼえているだけだ。[中略] 今日まで、わたしは自分の研究の倫理性について頭を悩ましたことはない」と彼はつづけた。「自然の研究は、人間を最後には自然と同じように無情なものとする。わたしは自分の追求する問題以外には目もくれずに進んできたのだ」(Wells 75)

「知的な欲望の、奇妙な無色の喜び」を語り、「自分の研究の倫理性について頭を悩ましたことはない」と喝破するモロー博士には、たしかに博愛主義的な動機はない。彼にはただ「奇妙な無色の喜び」としての「知的な欲望」があるばかりなのである。ただ「研究への情熱」に駆られているだけなのである（Wells 96)。「(神の) 被造物としての仲間」たる動物への「共感による痛み」の感覚を失い、彼らを「一個の問題」としてしか見ない、「倫理性」を失った科学研究。淘汰されゆくさまざまな被造物を無情にながめるダーウィニズム的自然と同じように「無情」となった科学研究。それはまさにグリーンウッドが述べている科学的実践にほかならない――「知識を、それ自体のために、宗教性・道徳性・有益性へ

の配慮からまったく独立して追求すること」(Greenwood 524)。

そしてもうひとりの登場人物ブレンディックはモロー博士の生体解剖の実験のなかに狂気を見ている。彼は、モロー博士の「研究への情熱」を、「この島の痛ましい無秩序」の本質的な原因と見なし、その「無秩序」を目にすることで「世界の正気にたいする確信を失ったと告白しなければならない」(Wells 96) と述べているからである。さらにモローの実験を「狂った、無目的の研究」(Wells 95) と呼んでいるからである。そのような彼にとって、モローは紛れもなくマッド・サイエンティストということになるだろう。

ところで生体解剖論争において、科学者の「研究への情熱」の動機として想定されていた4つの動機がある――(1)「博愛主義」(人類にとっての「なんらかの直接的な利益」を追求する)、(2) 自己目的化した知識欲 (知識をそれ自体のために追求する)、(3) 名声欲 (知識を科学者としての名声獲得のために追求する)、(4) 快楽欲 (実験動物に苦痛をあたえることによってサディスティックな快楽を追求する)。

言うまでもなくこの動機は順番が下がっていくにつれて、社会的容認度も下がっていくのであるが、以下の文章は、人類のためという生体解剖の博愛主義的動機は見せかけであって、その背後にある真の動機は、結局、たんなる知識欲であり――彼は自己目的的な知識欲に動機づけられた科学を「狂気におちいった科学 (science run mad)」と呼んで批判している――、しかもその知識欲の背後にはなんのことはない名声欲という明らかに利己的な動機がひそんでいることを指摘しているのである。

> [科学者たちは] これらの実験が病気の予防や治療のための新しい方法を発見するために行なわれるという [一般の人びとの] 考えを嘲笑し、これらの邪悪な行為はひたすら純粋に科学の発達のために行なわれると言い放つ――そんなものは狂気におちいった科学なのだが。わたしが確信するところでは、多くの場合、これらの非道な行為は、高度に進歩した生物学の代表的研究者としての、くだらない見せかけの高名を得る目的で行なわれるのである。(*Fourth Annual Conference of the Scottish Society for the Total Suppression of Vivisection, Held on 26th May, 1883*, cited in French 314)

さらに、知識欲の果てに快楽欲が横たわっていることについてはルイス・キャロルとレズリー・スティーヴンが述べているところを見てみよう。

> 人間がその内部に野獣の性質を有しており、虐殺の光景を目撃することによって彼の心中に血への渇きがかきたてられること、そして、はじめはおぼえる恐怖の本能が慣れから麻痺し、苦痛をあたえることがまずは無関心の対象となり、やがて病的な関心事となり、積極的な快楽となり、さらにはおぞましく残虐な悦楽へと変わっていくことは、屈辱的であるが否定しえない真実である。(Carroll 851)

> 医学生は研究をつづけるうちに血と苦痛の光景に慣れていく。ゆえに克服すべき本能的嫌悪感をもたなくなる。もしも残酷な性格の持ち主ならば、その嫌悪感はかすかな快感にとってかわりさえする。彼は犠牲となる動物を、漠然とした自己満足や勝利感とともにながめる。(Stephen 476)

このふたつのテクストに共通して認められるのは、生体解剖による知識の追求が、犠牲となる動物に痛みをあたえること自体に快楽や快感や悦楽を感じるサディズムへとしだいに変容していくという指摘だろう。たとえ知識の追求が人類のためという博愛主義を目的としていても、あるいは知識それ自体を目的としていても、生体解剖という行為のなかにそのような病的な傾向をうながすものがある、ということなのである。

そのうえでキャロルは以下のように述べている。「肉体の苦痛よりは魂の堕落こそがより大きな悪である」以上、生体解剖のより大きな害悪とは、犠牲となる動物の肉体に加えられる痛みにあるのではなく、むしろ、その実行者の精神にたいして加えられる道徳的堕落にあると言うべきである、と。こうして自己目的化した知識欲がサディスティックな快楽欲へと通じていくというモティーフは、確実にマッド・サイエンティストとしての科学者像を人びとの想像力のなかに定着させていったのである。

2　有用性の徴を求めて

もしも科学者が生体解剖において知識を知識として自己目的的に追求するとしたら、その知識欲はほどなく彼を名声欲あるいはサディスティックな快楽欲へと導くだろう。生体解剖を実行する科学者はそのような誘惑にたえずさらされており、そして、その誘惑は彼を「魂の堕落」したマッド・サイエンティストに変えるであろう。

生体解剖が呈示するさまざまな誘惑に屈服することで狂っていく科学者というこのようなモティーフは、生体解剖論争のディスコース圏のなかで頻繁に織りあげられる典型的な科学者のイメージだった。たとえばモナ・ケアドは、マンテガッツァというイタリアの生理学者を、典型的なマッド・サイエンティストとして紹介している。その生理学者が『痛みの生理学』という著書のなかでみずから書いているところによると、彼は「痛みの性質」を研究するために、可能なかぎり大きな痛みを創造できる独創的な器具を発明したうえで、痛みにあえぐ動物を「大いなる喜びと忍耐力をもって」観察しつづけたという。そのことを紹介しながら、ケアドはこう述べる。

> この男が狂っていると信じられれば安堵もできようが、生理学者が独特の誘惑をおぼえるさまざまな機会をもち、それに曝されることによって、つねにこれとまったく同じ種類の狂気がつくりだされることをわたしは不幸にも知るようになった。(Caird 18)

これは、生理学的・医学的真実への「誘惑」がサディスティックな快楽欲を生みだしながら、マッド・サイエンティストをつくりだすというモティーフの典型的な例である。そしてもしも生体解剖が「独特の誘惑」をはらみ、狂気という精神の病と「魂の堕落」とをもたらす危険な行為なのであれば、科学者は「誘惑」に屈しないよう、たえず監視されることを必要とする。動物愛護派の人びとにとって生体解剖法はそのためのものだったのである。それはいちおう自己目的化した生理学的知識の追求を可能性として許容している。しかも、生体解剖法を根拠にして科学者が告発された事例はけっして多くはない。

しかしにもかかわらずそれはあってもなきがごとき法律ではなく、「被告［＝科学者］を無罪放免としたうえで、生涯にわたって警察の監視下に置くという宣告を下した」(Lowe 716) にも等しいものとして、科学者たちの行動のみならず心理にも大きな影響をあたえる強力なイデオロギー的力を発揮していたのである。その法律の存在をある科学者はたとえばこう嘆いてみせる。

> 現在、インドでは、年間2万人の人が毒蛇のために命を落としている。もしも動物実験ができないために、その助けを借りられるよりも治療法の発見がたとえば5年遅れ、その間に10万の命が失われたとしても、どうということはないのだろうか。それが生体解剖法のほとんどばかばかしい帰結であるのだから、よく考慮してみる必要がある。わたしは、ネズミ捕り業者がたとえどんな毒を選んだとしても、彼にお金を払って自宅のネズミを駆除してもらうことができる。ところがわたし自身は、内務相からの許可証がないかぎり蛇の毒を用いてネズミを殺すこともできないし、それに加えて証明書がないかぎり、そのあとネズミを生かしておこうとすることもできないのである。(J. Paget 928)

ネズミ捕り業者がネズミを殺すことは許される。しかし、科学者が動物実験のためにネズミを殺すことは許可証がなければ許されない。動物に加えられる痛みのあるなし、多い少ないが許可と不許可を分けているのではない。そのふたつを分けているのは、狂気と魂の堕落へと通じる「誘惑」のあるなしなのである。ネズミ捕り業者がネズミを殺すことにサディスティックな快楽をおぼえることはありえないだろうが、生体解剖実行者ならばありうる。それはなぜか。

それは、前者が害獣の駆除という明確な有用性をもっていて、それ以外の目的なり動機をもちえないのにたいして、後者は知識を有用性のためではなくそれ自体のために追求する知識欲への「誘惑」、名声欲への「誘惑」、さらにはサディスティックな快楽欲への「誘惑」をはらんでいるからである。そもそも、生体解剖法の条文が「生理学的な知識」と「有用となるであろう知識」とを別物であるかのように、あるいは別物として記述しているではないか。その狭間に魂の落とし穴が口を開いているのである。そう、かならずしも有用性とむすびつかない知識を、それ自体のために追求することは、その科学者に「魂の堕落」をもたらし、彼をマッド・サイエンティストと化する危険性があるのである。

そうならないためには、彼の目的をつねに有用性に、そして彼の動機をつねに博愛主義にむすびつけておかなければならない。こうして後期ヴィクトリア朝の反生体解剖派の人びとは、科学者が己れの行為を正当化すること、「正当で十分な理由」となる有用性を示すことをたえず要求していた。

> われわれは、痛みのない死によって動物の生命に終止符を打つ人間の絶対的権利を否定するものではないが、痛みを加えることについての正当で十分な理由（good and sufficient cause）が示されることを要求する。(Carroll 853)

そして科学者は、有用性を求めるそのような要求を戸惑いと苛立ちまじりに意

識せざるをえなかったし、生体解剖法のもとで、自分が獲得しようとしている「生理学的な知識」の有用性をつねに示す用意をしておかなければならなかったのである。

> 「邪曲にして不義なる代は徴を求む」（「マタイ伝」16章4節）と言われているが、ちょうど同じ批判は、科学によって新しい事実を呈示されたとき、そのことの利益はなにか、どうすればただちにそれをわたしの目的に奉仕させることができるか、とつねに問いかける人びとに下されてしかるべきであろう。（Horsley 810）

この医学生理学者ホースリーによる言葉は、生体解剖論争のディスコース圏が科学者にたいして及ぼしていた大きな心理的圧力を例証していると言えるだろう。後期ヴィクトリア朝の人びとはたえず科学者に有用性の徴を求めていたが、それはかならずしもその有用性そのものを利用しようとするためではなく、その要求をつうじて科学者が自己目的化した知識を求めるマッド・サイエンティストに堕していないことの証拠と保証を求めるためだったのである。

そしてこのようなディスコース圏のなかでプレンディックもモロー博士に、「あなたが動物にこのような痛みを加えることを正当化できるだけの理由はどこにあるのですか。生体解剖が許容されるのは、それがなにかに応用（application）できる場合だけではないのかと――」（Wells 73）と問うていた。

ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』（1897）のテクストにも、科学者がもうひとりの科学者に有用性の徴を求めるというモティーフが出てくる。それは、ドラキュラに血を奪われることによって死亡したルーシー・ウェステンラの死体解剖にかんして、シューワード博士と彼の医学における師、ヴァン・ヘルシング博士が交わす会話のなかに埋めこまれている。

> 「明日になったら、夜になるまえに、死体解剖用のメス一式をもってきてほしい」
> 「検死解剖をしなければならないのですか」
> 「そうだとも言えるが、そうでないとも言える。手術をしたいのだが、君が考えているようなものではない。［中略］わたしは彼女の頭を切り離し、心臓を取り出したいのだ。ああ！　外科医である君が、それほど驚いてしまっている！　生者であれ死者であれ、ほかの医学生が身震いするほどの手術を、おじけることなく、手を震わすことさえなく、わたしの目の前で見事にやってのけた君が。［中略］」
> 「でも、いったいどうしてそんなことをなさるのですか。ルーシーは死んでいるのですよ。必要もないのに、どうして彼女の身体を切り刻まなければならないのですか。検死解剖の必要がなく、そうすることでなんら得るものがないというのに、なんの利益もないというのに――ルーシーにとっても、われわれにとっても、科学にとっても、人間の知識にとっても――、なのにどうしてなのですか。利益がないなら、それは極悪非道になります」（Stoker 149）

ここでヴァン・ヘルシング博士がシューワード博士に提案しているルーシーの検死解剖はむろん生体解剖ではない。しかし、死んだはずのルーシーが「不死者」になっているという吸血鬼小説の設定のなかでは、それは生体解剖と言えなくもなかろう。いずれにしろより重要な問題は、「科学にとっても、人間の知識にとっても」「利益がないなら、それは極悪非道になります」というシューワード博士の言葉が、ヴァン・ヘルシング博士が「極悪非道」のマッド・サイエンティストではないということの証明として、有用性の徴を求めるためのものだったという事実である。

『ドラキュラ』のなかにはもうひとつこれと類似したモティーフを見いだすことができる。すなわち第6章において、精神病の医師、ジョン・シューワード博士は、彼の病院の入院患者であるレンフィールドの症状に興味をいだく場面である。その患者は、多くの蠅を蜘蛛に食わせ、つぎに多くの蜘蛛を鳥に食わせたうえで、多くの鳥を食わせるための猫をほしいと申し出てくる。そのようにして生命を累積的に集めたうえでおそらくそれを自分が摂取しようというのであろうが、シューワード博士はこの異常な症状を「生命嗜食狂（zoophagous (life-eating) maniac）」と名づける。そして、求めに応じて猫をあたえるといったいなにが起こるだろうか、と想像する。

> この実験はやり遂げればそれなりの価値があるだろう。しかも十分な理由（a sufficient cause）さえあれば実行できるのだ。人びとは生体解剖をあざけってきたが、今日のその成果を見るがいい！　科学を、脳についての知識という、そのもっとも困難で重要な面で前進させていけないわけがあろうか。

もしもこのような精神の秘密を解き明かすことになれば――ひとりの狂人の妄想を解明する手掛かりを握ることにさえなれば――わたしは、バードン＝サンダソンの生理学やフェリアーの脳の研究など遠く及ばない水準にまで、自分の研究分野を高めていけるだろう。それには十分な理由さえあればいいのだ！　しかしこのことをあまり考えすぎてはいけない。さもなければ誘惑に負けてしまうかもしれない。ちゃんとした理由さえあればわたしにもチャンスがめぐってこようが。(Stoker 71)

ここでシューワード博士は、知識と名声という生体解剖の「誘惑」に魅せられている。すなわち、ドラキュラを退治することになる正義の英雄のひとりとして性格造形されている彼は、少なくともこの箇所においては、じつは人間への生体解剖に手を染めるマッド・サイエンティストになりかけているのである。

しかし、ここでより注目したいのは、シューワード博士が「誘惑」をおぼえながら、それを正当化するための「十分な理由」をみずからに求めているという事実である。「十分な理由」としての有用性の徴を自分にたいして求めているという事実である。そして彼は、人体実験の「理由」をみずからに求めながらそれが得られないために、かろうじてそれを断念するのである。その断念によって彼は、またかろうじて「英雄としての科学者」(Haynes, chap. 11) になる資格を保証されるのである。

この場面のシューワード博士は、有用性の徴を求める声にたえずさらされている後期ヴィクトリア朝の科学者が、その声を己れの心に内在化させてしまっている姿を表象しているのかもしれない。彼らはマッド・サイエンティストという批判を免れるために、実験動物にあたえる痛みを十分に正当化できる「十分な理由」として、その実験の有用性をいつも示さなければならない――この強迫的状況のなかで、有用性の徴を求める声は、科学者の心のなかに内面化されいわば科学者の良心のごとき存在にさえなっているのである。

生体解剖論争のディスコース圏のなかで、後期ヴィクトリア朝の科学者は、自己目的化した知識の追求という「誘惑」に陥らないよう、たえず有用性を問われているような強迫的な心理状態にあった。つねに「監視下に置」かれているような心理になるほど、そしてついにはそれが内面化されて自分の良心のごとき存在になるほど、彼らは有用性の徴を強く求められていたのである。逆にいえば、科学者の自己目的化した知識欲にたいするヴィクトリア朝の人びとの不信はそれほどまでに強かったということである。

3　オスカー・ワイルドの唯美主義と生体解剖

オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(1891) の主人公、「輝ける青春」の具現化と称されるドリアン・グレイは、肖像画をバジル・ホールウォードによってえがかれることで、みずからの若々しい美しさ（「穢れることなき輝かしい永遠の若さ」*iii [DG 210]）を誇らしげに自覚することになる。それが物語の発端である。そして彼はその己れの美しさをながめながら我知らずこう述べる。

「やがてぼくは年をとって醜悪な姿になる。ところが、この絵はいつまでも若さを失わない。[中略] ああ、もしこれが反対だったら！　そうなるものなら、そうなるものなら、ぼくはどんな代償も惜しまない。この世にあるどんなものだって惜しくない。そのためなら、魂だってくれてやる！」(DG 27-28)

この言葉は現実のものとなり、「魂」を代償にして「永遠の若さ」を獲得したいというドリアンのファウスト的な夢はかなえられる。それから18年以上あとになっても、ドリアンは、「あいつは悪魔に身売りして、かわいい顔を買ったんだとさ」(DG 183) と噂されるとおりに、どんなに年齢を加えても「かわいい顔」のままなのである。

しかしこの願掛けがかなえられるのとほぼ同時に、彼は、ヘンリー・ウォットン卿の唯美主義的思想の影響をうけ、道徳的な退廃を示しはじめる。まず彼は、芸術の虚の世界にのみ生きる女優シビル・ヴェインに恋するが、その恋に応えて人生という実の世界へと踏みだそうとした彼女を、残虐にもそのことを理由に捨て去ることで、彼女を絶望と自殺に追いこむのである。人生よりも芸術を、真心よりも「俳優の演技」(「序文」、DG 4) をというこの選択は、まさに唯美主義的な芸術観のあらわれにほかならない。この作品の唯美主義的「序文」にも、「芸術を顕し、芸術家（＝芸術家の人生）を覆い隠すことが芸術の目標である」(DG 3) とある。

そしてシビルにたいする残虐さに発する道徳的退廃もドリアンの肖像画に影を落とす（肖像画に影を落とすのは加齢だけではなかったのである）。シビルとの事件後、彼の口元には「残酷な感じ」(DG 87) が浮かんでくるのである。それ以後、彼は、交際するさまざまな人びとを社会的破滅へと誘惑しながら、みずから

も魂の堕落へと落ちていく。そしてそれに応じて、彼の肖像画は、あたかも彼の「良心」を如実に体現しているかのように、いよいよ醜悪さを増していく。

しかしそれにもかかわらず、現実の彼はその醜悪から自由でありつづけ、「永遠の若さ」をたたえた美貌のままである（美と道徳は相互にまったく無関係なのである）。「罪の徴候と忍び寄る年波」（DG 124）はいずれも、ドリアンの肉体に刻まれることはない。それにたいして悪徳と加齢とともにいっそう醜悪になっていく肖像画のほうは、彼が密かに屋根裏部屋に移し隠してしまう――彼が己れの罪の意識から逃れようとするかのように。

もちろんドリアンは、どんどん醜悪になっていく肖像画を屋根裏部屋に隠すことだけで罪の意識から逃れることはできない――「われわれが衝動を絞め殺そうとすると、それは今度は精神の内部に潜りこみ、われわれを毒しつづける」（DG 21）とヘンリー卿が述べるとおりである。そう、肖像画は罪の意識によって毒される「良心」という「精神の内部」だったのである――「変化しようとしまいと、この絵は俺にとっては良心の可視の象徴なのだ」（DG 89）とドリアン自身気づくことになるように。

ある個人において道徳と表面的な美はたしかに別個の世界を構成し、相互に無関係である。だからこの世に美しい犯罪者は存在するだろう。しかし彼あるいは彼女にも良心は存在するだろう。だとすれば道徳的堕落は「精神の内部」を毒し、それを醜悪にせざるをえない。これはワイルドらしからぬ凡庸な教訓と言うべきか。「残虐な行為を行なえば、それはかならず精神なり道徳意識になんらかの影響をおよぼすことになる」（Caird (1897) 46）と述べたのは生体解剖を論じていたモナ・ケアドだったが、彼女のようなまじめな芸術家にこそふさわしい教訓と言うべきか。

そして18年後、己れの道徳的堕落におののくドリアンは、そのきっかけをつくったバジルを屋根裏部屋に誘う。ドリアンの悪い噂の真実を知ろうとするバジルが、「すくなくとも、こうしてきみを見ていると、あんな噂は信じられない。罪はひとの顔にありありと現れるものだ。いくら隠そうとしても無駄だ」（DG 143）と述べるからである。しかしバジルはドリアンの醜悪な肖像画を見せられても、「そんなことはありえない。この部屋は湿気が強い。だから黴が画布に食いこんだのだ。ぼくの使った絵の具に、なにかたちの悪い毒性の鉱物が混じっていたのだ」（DG 150）と述べるのみである。

そしてドリアンは己れの醜悪な肖像画のまえでバジルを殺害する。そのようにしてついに殺人までも犯してしまうのだが、犯罪の露見を恐れる彼は、かつて18

か月のみ友人だったことのあるひとりの科学者アラン・キャンベルに、化学的処理によるバジルの遺体の抹殺を依頼する。もちろんアランは抵抗する。するとドリアンは、握っていたアランの弱み（それがなにかは明示されないが）につけこんで脅迫的に要求するのである。そのアランとはこういう人物である。

> なんといっても彼の知的な情熱は科学に集中していた。ケンブリッジに在学中、彼は多くの時間を実験室内で費やし、彼の学年の自然科学優等試験には優秀な成績を収めた。いまでも化学の研究に没頭していた。［中略］［ドリアンとの親しい間柄が終わったのち］日に日に彼はますます生物学に惹かれるようになり、ある珍しい実験に関連して彼の名が科学雑誌に出たことも一度か二度あった。（DG 158-159）

「生物学」の「珍しい実験」？　それが生体解剖だったかどうかはともかく、このようなアランにたいしてドリアンはこう迫っている。

> 「いいから聞いてくれ、アラン。ぼくの頼みは、ただある科学実験をしてくれというだけのことなのだ。君は病院や屍体置場に行くだろう。そこで君がやる怖ろしいことを君はなんとも思わない。かりにこの男がどこかの陰惨な解剖室か悪臭芬々の実験室で、流れる血を通すために掘りこまれた赤い溝のある鉛の台の上に横たわっているとすれば、君はそれを見ても、ただお誂えの研究対象だと思うだけだろう。髪の毛ひとつ動かしはしまい。自分がしていることを間違っているなどとは決して思うまい。逆に、自分は人類に貢献しているのだ、世界の知識を増大させているのだ、あるいは知的好奇心を満足させているのだ、といった風に考えるだろう。」（DG 162）

そのうえで、ドリアンはだめ押しのようにアランに、「純粋に科学的な見地からこの事件をながめればいい」（DG 162）と述べる。端的にいえば、善悪の判断を放棄し、没道徳的になることを求めているのである。己れの「知的好奇心を満足させ」るために、知識を自己目的的に、没道徳的に追求し、しかも「自分は人類に貢献している」という己れの博愛主義的動機をそのまま信じている、あるいは信じているふりをしているマッド・サイエンティスト――要するに、生体解剖論争のディスコース圏のなかでつくられていた科学者像そのままの科学者たるこ

とを、ドリアンはアランに求めていたのである。

こうして、没道徳的な人生を生きる唯美主義者ドリアンと没道徳的たることを強要される科学者アランは、遺体の抹殺という犯罪において共犯者となる。そしてそれが、完全には没道徳的になれない、完全には良心を抹殺できないアランを自殺へと追いこんでいく。その一方で、ドリアンはどうなるのか。彼もまた良心に苛まれる。「これは俺にとって良心と同じようなものだったのだ。そうだ、良心だったのだ」(DG 212) と叫びながら、己れの醜悪な肖像画にナイフをむけるからである。そして彼も死ぬ——道徳的な退廃をそのまま映し出すかのような怖ろしく醜悪な姿と化して。

人生を芸術に変えて、あるいは（「人生が君の芸術だった」(DG 207) というヘンリー卿の言葉どおり）人生を芸術として生きて、人生の芸術家として没道徳的たろうとし、「芸術家たるものは道徳的な共感をしない」、「善も悪も芸術家にとっては芸術の素材にすぎぬ」（「序文」、DG 3-4）とうそぶくのがヘンリー卿の教える唯美主義的芸術家だったとすれば、この小説は唯美主義的思想の破綻をえがいている道徳的な書物と言わざるをえまい。もちろん「序文」であらかじめそのような読解の可能性が否定されてはいるものの——「道徳的な書物とか反道徳的な書物といったものは存在しない」(DG 3)。

それはともかく、もうひとつ、『ドリアン・グレイの肖像』のテクストが生体解剖論争のディスコース圏のなかで織られていることを示している箇所がある。

> 彼（ヘンリー卿）はつねづね自然科学の方法に魅せられていたが、自然科学のふつうの研究題目は彼には些細でつまらないものに思われた。そこでまず、自分を生体解剖（vivisecting）してみることからはじめ、最後には他人の生体解剖をこころみるようになった。［中略］苦痛と快楽が混合する奇妙な坩堝のなかで人生を観察する場合、ガラスのマスクをかぶることもならず、硫黄のガスに脳を冒され、奇怪な妄想とゆがんだ夢想とで想像力が濁らされるのを避けることはできない。毒のなかにはひじょうに微妙なので、その性質を知るためには、どうしてもそれに冒されてみなければならないものがある。疾病のなかには、罹ってみてはじめてその性質が理解できるようになる異様なものがある。しかしながら、それによって得られる報償はじつに莫大なものだ！　世界全体がまたとなくすばらしいものと化すのだ。(DG56)

「毒のなかにはひじょうに微妙なので、その性質を知るためには、どうしてもそれに冒されてみなければならないものがある。疾病のなかには、罹ってみてはじめてその性質が理解できるようになる異様なものがある」——生きた人間を用いて実験してみなければその本質が理解できない「毒」なり「疾病」がある以上、「苦痛と快楽が混合する奇妙な坩堝」のなかに、実験材料としての人間を投げこみ「生体解剖」するしかないではないか。ヘンリー卿という唯美主義者が、生きた人間にたいして「生体解剖」を実行する科学者として形象されているこの箇所は、唯美主義的芸術家と生体解剖を実践する科学者の類似性をくっきりと際立たせているだろう。

そういえば、ヘンリー卿がモロー博士を連想させる発言をする箇所にも注目しておく必要がある。後者の科学者が「共感による痛み（sympathetic pain）——そんなものは、ずっと昔の体験としておぼえているだけだ」と述べるのにたいして、前者の唯美主義者は「ぼくはなんにでも共感できるが、苦悩にだけは共感できない。［中略］現代人が抱く痛みにたいする共感（sympathy with pain）にはなにかひどく病的なところが感じられる」。そのうえでヘンリー卿はこうつづける、「19世紀は共感を過剰消費して破産してしまったのだから、われわれはその誤りを正すべく科学に訴えるべきでしょう」(DG 41)。

ならば、ヘンリー卿の「生体解剖」の対象は誰か。はじめは自分自身、そして最後には他人とある。もちろんその他人とは、具体的にはドリアンにほかならない（「ドリアン・グレイこそお誂えの題材であり、豊かな実りの多い結果を約束しているように思われた」[DG 58]）。『ドリアン・グレイの肖像』とは、唯美主義的芸術家であるヘンリー卿が、ドリアンに唯美主義的思想という「毒」、ないし「疾病」を発生させる病原菌を投与することをとおして、彼を「生体解剖」する物語なのである。

そしてその「生体解剖」によって得られる「莫大な」「報償」とはなにか。そもそも「報償」は得られるのか。それがこの作品自体だとしても、「序文」には「あらゆる芸術はまったく無用である」(DG 4) と書かれているではないか。無用なものが「莫大な」「報償」になるだろうか。それとも、この物語はその「序文」を裏切って道徳的な有用性を包含しているのか。そこにえがかれるドリアンの退廃の人生は有用な教訓を包含しているのか。実際、ワイルド自身が、ある書簡 (the St. James' Gazette 宛、1890年6月26日付) のなかで、この作品には「怖ろしい教訓」があると述べ、その中身を「あらゆる過剰は、あらゆる放棄と同様に、みずからのうえに懲罰をもたらす」という言葉で呈示しているではないか[*iv]。

そう、『ドリアン・グレイの肖像』には怖ろしい教訓がある。猥褻な人間には見つけることができないが、健全な心をもったあらゆる人間には顕れる教訓である。これは芸術的過誤ではないのか。おそらくそうであろう。が、それがこの本の唯一の過誤なのである。(Wilde [1962] 259)

『ドリアン・グレイの肖像』とは、「序文」に「あらゆる芸術はまったく無用である」とあるとおり、道徳的には「まったく無用の」唯美主義的作品、没道徳的な「芸術のための芸術」なのか。それとも、その唯美主義的「序文」を裏切って、有用な教訓をふくむ道徳的な作品として「莫大な」「報償」を提供しているのか(「序文」には、「有用なものを造ることは、その制作者がそのものを讃美しないかぎりにおいて赦される」ともある)。それとも「怖ろしい教訓」をふくみながらそれが「唯一の［芸術的］過誤」でしかないとうそぶいている、失敗作としての唯美主義的作品なのか。

こうして、唯美主義的作品としての『ドリアン・グレイの肖像』は、生体解剖が「知識のための知識」を追求するだけの無用で没道徳的な実践であるのか、それともこの世界に具体的な恩恵をもたらす有用な道徳的実践であるのかを最大の論争点のひとつとしていた生体解剖論争と、道徳性／没道徳性、有用性／無用性という主題を共有することになる。そして『ドリアン・グレイの肖像』を生体解剖論争のディスコース圏のなかで読むことで浮かびあがってくるのは、唯美主義的な芸術家と生体解剖を実践する科学者との意外な類似性、そして「芸術のための芸術」であれ「知識のための知識」であれ、自己目的的な実践が必然的に孕むかにみえる没道徳性にたいする後期ヴィクトリア朝人の根深い嫌悪感と恐怖感なのではないだろうか。

注

*i「たんなる知識（mere knowledge）」(Freeman 623) は、「たんなる好奇心（mere curiosity）」／「純粋に知的な好奇心（purely intellectual curiosity）」(Lathbury 218)、「知識への熱狂（enthusiasm of knowledge）」(Hoggan 523)、「発見のデレッタンティズム（Dilletantism of Discovery）」(Cobbe 15)、「知識欲（lust of knowledge）」(Greenwood 527)、「知識への渇望（thirst of knowledge）」(W. Paget 15) など、さまざまな名前で呼ばれていた。それだけこの論点が重大だったことをあらわしているだろう。

*ii Darwin (1903), vol. 2, 440-441.　ここでダーウィンが言及しているガーニーの論文の該当箇所は、Gurney (1881) 778 および (1882) 191 にある。

*iii Wilde (2003)からの引用は DG の略語とともに頁を括弧で示すこととする。和訳は福田恒存による新潮文庫版（昭和 42 年）を使用させていただいたが、多少変更を加えたところがある。

*iv この書簡は『ドリアン・グレイの肖像』第一版（13 章からなり、1890 年 6 月 20 日、*Lippincott's Monthly Magazine* に掲載）と「序文」(1891 年 3 月、*Fortnightly Review* に掲載）のあいだに、この作品の不道徳性を批判する書評にたいする反論として書かれた。したがって、この作品の道徳性を認める内容となっている。しかし「序文」ではその姿勢が変わっている。その後、1891 年 4 月には、20 章からなる『ドリアン・グレイの肖像』第二版が Ward, Lock, and Company 社から出版された。

Works Cited

Mona Caird, *Beyond the Pale: An Appeal on Behalf of the Victims of Vivisection* (William Reeves, 1897)

Lewis Carroll, "Some Popular Fallacies about Vivisection", *Fortnightly Review* 23 (1875/6), pp. 847-54

Frances Power Cobbe, *The Moral Aspects of Vivisection* (William and Norgate, 1875)

Charles Darwin, *More Letters of Charles Darwin*. 2 vols., eds. F. Darwin & A.C. Seward (John Murray, 1903)

Edward A. Freeman, "Field Sports and Vivisection", *Fortnightly Review* 21 (1874/5), pp. 618-29

Richard D. French, *Antivivisection and Medical Science in Victorian Society* (Princeton UP, 1975)

George Greenwood, "Vivisection", *Macmillan's Magazine* 40 (1879/10), pp. 523-30

Edmund Gurney, "A Chapter in the Ethics of Pain", *Fortnightly Review* 36 (1881/12), pp. 778-796

Edmund Gurney, "An Epilogue on Vivisection", *Cornhill Magazine* 45 (1882/2), pp. 191-99

Roslynn D. Haynes, *From Faust to Strangelove: Representations of the Scientist in Western Literature* (The Johns Hopkins UP, 1994)

George Hoggan, "Vivisection", *Fraser's Magazine* 90 (1875/4), pp. 521-28

Victor Horsley, "The Morality of 'Vivisection' (No. I)", *Nineteenth Century* 32 (1892/11), pp. 804-11

D. C. Lathbury, "Cruelty to Animals", *Cornhill Magazine* 29 (1874/2), pp. 213-26

Robert Lowe, "The Vivisection Act", *Contemporary Review* 28 (1876/10), pp. 713-24

James Paget, "Vivisection: Its Pains and its Uses" (No. I), *Nineteenth Century* 10 (1881/12), pp. 920-30

Walburga Paget, "An Unscientific View of Vivisection", *National Review* 18 (1891/9), pp. 12-18

Leslie Stephen, "Thoughts of an Outsider: The Ethics of Vivisection", *Cornhill Magazine* 33 (1876/4), pp. 468-78

Bram Stoker, *Dracula*, eds. Nina Auerbach and David J. Skal (1897; W. W. Norton & Company, 1997)

Thomas Watson, "Vivisection", *Contemporary Review* 25 (1875/5), pp. 867-70

H. G. Wells, *The Island of Doctor Moreau*, ed. Patrick Parrinder (1896; Penguin Books, 2005)

Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray*, ed. Robert Mighall (1891; Penguin Books, 2003)

Oscar Wilde, *The Letters of Oscar Wilde*, ed. Rupert Hart-Davis, (1891; Rupert Hart-Davis Ltd, 1962)